
薔薇の雫

粹

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

薔薇の雫

【Nコード】

N6744F

【作者名】

粹

【あらすじ】

初めての彼氏ができた百合^{ユリ}。薔薇^{ショウビ}という名の彼は優しくて容姿淡麗な素敵な男の子。百合と薔薇は両思いなはずなのに、薔薇は手をつなぐことすらしてくれない。薔薇には百合に言えない重大な秘密があったー。

第一話 淡い色（前書き）

この小説は、性的虐待についての文を含みます。
苦手な方、辛くなってしまう方は閲覧をご遠慮ください。

第一話 淡い色

私が薔薇^{ショウビ}くんと付き合えることになったのは高校2年生の梅雨の時期。

入学式の日に一目惚れをして、薔薇くんを目で追いかけるだけの毎日に私は自分で終止符を打った。

薔薇くんに会うまで、恋とか愛とかそういうことを意識したことが無かった私は戸惑いながらも告白した。

「俺に話してなに??」

放課後、教室に残って欲しいとメモで伝えた私の為に薔薇くんは教室に残ってくれていた。

窓から入る夕陽を受けて薔薇くんの全てがキラキラして見える。

きつと薔薇くんは私が告白しようとしてるの分かってる。

教室に残って待ってて、なんてあからさまだったと今気付く。

こういふときって顔が赤くなるものだと思ってたのに、断られるのが怖くて私の顔は青ざめる。

私のことを色素の薄い瞳で薔薇くんは見ている。

何も言わない私を、いつもの穏やかな微笑みで見ている。

「あの・・・」

「うん」

「こんなこと急に言われても困るかもしれないんだけど・・・」

「うん」

私はぎゅっとスカートを握り締めて思い切って言った。

「入学式の日に傘を貸してくれたときからずっと、ずっと好きでした！彼女にしてください！！！！」

もしかしたら、廊下中に響くんじやないかってぐらい大きな声が出てしまった。

でも、薔薇くんから返事は返ってこない。

恐る恐る顔をあげると、薔薇くんは俯うつむいていた。

「・・・・・・・・。」

「・・・・・・・・。」

どうしよう、やっぱり困ってる。
なんだか泣きたくなってきた。

「・・・黙っちゃってごめん。」

しばらくして、薔薇くんは俯いたまま小さな声で言った。

「・・・ごく、すごく・・・嬉しくて」

顔を上げた薔薇くんと目が合う。

薔薇くんの顔は真っ赤になっていた。

「・・・ほんとに俺でいいの？罰ゲームとかじゃなくて？」

いつもにこにこしている薔薇くんのいつもと違う表情に私まで真っ赤になる。

今の薔薇くんは、いつもと違ってどこか必死で、今にも泣きそうな顔をしてる。

私の目にも涙がたまってくる。

「ほんとに好きなの・・・」

「・・・嬉しい」

薔薇くんは整った顔をくしゃくしゃにして涙目で笑った。

今でも、その顔は忘れられないぐらい綺麗で純粹だった。

第二章 噂（前書き）

この小説は性的虐待についての描写を含みます。
苦手な方、辛くなってしまう方は閲覧をご遠慮下さい。

第二章 噂

薔薇^{しょうび}くんと付き合って3ヶ月になった。

薔薇くんは相変わらず優しいけど、手もつないでくれないしキスも、抱きしめることもしてくれない。

それどころか、触れることもしてくれなかった。

違和感に気付いたのは、つい最近のこと。

デート中、人ごみの多い道ではぐれそうだったから自然と私は薔薇くんの手を取った。

その瞬間、薔薇くんは立ち止まり私の手から自分の手をすごい速さで抜いた。

驚いて、私も立ち止まる。

「ごめん、百合^{ゆり}と手をつなぐのが嫌ってわけじゃなくて・・・その、女の子と手つないだこと無いからびっくりしちゃって・・・」

「あ、ああそっか！ごめんね、いきなり掴んじやって」

「俺こそごめん！」

その後は、手に触れることも肩を抱くこともしないで友達同士のような距離感でデートは終わったのだった。

次の日、学校で友達の香澄にその話をする香澄はニヤニヤ笑いながら言った。

「百合さあ、薔薇くんの噂とか知らないで付き合ってたんじゃないの？」

「噂・・・？」

「薔薇くんって、身長高いくせにその辺の女の子より綺麗な顔してるから目立っちゃうんだよね。いっっぱい噂立ってんじゃない。何であたしが知ってて彼女の百合が知らないのよー」

香澄は、私の知らない薔薇くんを知ってるの？

胸が不安でいっぱいになる。すごく悲しい気持ちになる。噂でもなんでも薔薇くんのことは全部知っていたいのに。

「教えて！その噂、私にも教えて！」

気付けば気持ちは、声に出ていた。

「いいけど、それで別れてもあたしのせいにしないでよねえー？」

香澄は笑いながら薔薇くんの噂を教えてくれた。

「さいとうしょうび斉藤薔薇はホモだって噂でー、理由がいっぱいあるのよね。きつとみんな色々好き勝手考えて尾ひれがついちゃったんだと思うんだけどー。薔薇くんはモテるのよ！1年生のころから！」

「そ、そうなんだ・・・？」

「そうよ！噂によるとー薔薇くんは1年生のときに部活の先輩に告

白されてるの。今は部長になってるあの女の人ね。それで、薔薇くんとその先輩は付き合ってたんだけどー・・・」

「だけど?!」

「薔薇くんは一切先輩に触れようとしなかったらしいの。結局、その先輩は自分に魅力がないんだって思うのが嫌で薔薇くんと別れたらしいけど・・・その後には薔薇くんと付き合った別の人も必ず同じこと言うのよ。」

「なに・・・?」

「彼は私に一切触れてくれない。むしろ避けられてた。ってね。」

私と一緒にだ・・・。

漠然とそう思った自分になんとか虚しくなる。

もしかして、私も薔薇くんと別れることになるの?

不安がどつと胸を重くする。

「それでホモなんじゃないかって噂が出て、そこから男の子と体育館倉庫でいちゃいちゃしてたとか、実は女だとか色々馬鹿みたいな噂が飛び回ってるわけ。本当かどうかは知らないけどね。」

「そ、そうなんだ・・・。知らなかった・・・。」

「でも百合、バージンでしょ? べつにHしたいとかそういう気持ちがないならいいじゃん!」

香澄が必死でフォローに入っているのが分かって、それがまた痛い。

「Hは・・・別にいいんだけどせめて手をつなぐぐらいは、したいなあ・・・。」

「そうやって薔薇くんに言ってみればいいじゃない! 本当の理由教えてくれるかもしれないよ? 実は全員タイプじゃなかったーとか!」

「うん! そうだよね! 噂なんかに流されないで、薔薇くんに直接聞いてみる!」

「それがいいよ！頑張ってね百合！」

香澄にぽんっと肩を叩かれ、少し勇気がわいた。
次に薔薇くんに出会ったときに勇気を出して聞いてみよう。

放課後、薔薇くんは美術部に行く。

美術部はほとんど部員がいなくて大体いつも薔薇くんが1人美術室で絵を描いている。

部長と恋人同士で、あんな理由で別れたらそうなってしまふものなのかも知れない。

そんなことを考えながら、今日も私は美術室へ行く。

薔薇くんが1人なことを良いことに、私は美術部でもないのに放課後はいつも薔薇くんの傍にいた。

美術室に入ると、薔薇くんは筆を止めて振り返る。

いつもどおりの優しい笑顔と声には、とても安心する。

「いつも見てるだけで楽しい？」

薔薇くんは絵を描きながら私に聞く。

薔薇くんは淡い色の薔薇に筆で色を置いていく。

そんな薔薇くんの白くて長い指、綺麗な爪の形をぼーっと見つめながら私は答える。

「楽しいよ、勉強になる」

「うそばかり」

薔薇くんは少し笑って、乾いた筆の先に再び絵具をつける。

薔薇くんという時間は、いつも穏やかで暖かい。きっと薔薇くんと

いっしょにしていると全ての人がぼーっとしてしまうだろうと思うぐらい心地良い空間を、薔薇くんは作る。
雰囲気がすごく柔らかいからだと思ふ。

でも今日は、この薔薇くんのペースにはまる訳には行かない。
聞かなきゃいけないことがある。

「あのね、今日噂聞いたんだ」

「そうなんだ、どんな？」

「・・・薔薇くんはホモだっていう・・・。」

「あはは、そうかもね」

聞きづらいことを聞いたはずなのに薔薇くんの回答のおかげで私に全く罪悪感がない。

こんな噂を彼女から聞かされて、嫌じゃないわけなのに薔薇くんは相変わらず綺麗に笑ってる。

「百合、俺がホモだったらどうする？」

薔薇くんが筆を置いた時に薔薇の色が濃くなっていく。

「ホモでも諦められないと思う・・・。」

「そっか・・・。」

薔薇くんが絵を描くの止め、私の方に向き直る。

付き合っているっていうのに、真っ直ぐ見つめられたのは久しぶりでその綺麗すぎる瞳の力に負けて私は目を逸らす。

自然に視線は薔薇くんの口元へいく。

色素が薄い薔薇くんは髪も天然で茶色くて、瞳の色も薄くて、肌も

すごく白いのに、唇だけは赤い。

「俺とキス・・・したい？」

「え?!」

凶星だったのかもしれない。

私は驚いて椅子から転がり落ちた。

そんな私の様子を見て、薔薇くんは小さく笑いながら言う。

「百合って分かりやすい」

「誰だって驚くよ!」

あははとやっぱり薔薇くんは穏やかに笑う。

私が椅子に座りなおしたことを確認すると再び話を始めてくれた。

「ホモかどうか、試してみよっか」

「私が彼女だよっ」

「うん、百合が俺の彼女。でもね、俺は百合が望むようなこと・・・つまり恋人同士がするようなことは、してあげられないと思うんだ。」

「え・・・?」

「今だって、転んだ百合に手を差し出すことすら出来なかった。最低だって思う。」

薔薇くんは笑ってる。

笑ってるけど、悲しそうでどこかいつもと様子が違ってきている。

「百合が好きだ。いつも一生懸命で明るくて可愛くて・・・。入学式するとき、下駄箱で声をかけるときほんとにドキドキして・・・。百合に傘を貸すまで女の子に話しかけるなんてしたことなかったか

ら。でも百合は可愛くて、俺、頑張ったんだ。」

普段、あまり自分の気持ちを話さない薔薇くんの言葉の力は凄く強くて私の顔と胸があっという間に熱くなる。

「百合に告白されて、本当に嬉しくて・・・でも、いつも百合を傷つけてる気がするんだ。手もつなげないし・・・百合はキスをしたがってるから。」

そんなにはっきり言われると、とても恥ずかしい。
どんだんだん顔が赤くなる。

「俺はキスをしたいとか、百合に触れたいとか思わないんだ。それは嫌いつてわけじゃなくて・・・」

「・・・ホモだから？」

「それも違うよ。男と付き合うなんて、それこそ考えられない。でも、そうした方がいいのになって最近と思う。俺は、女の子を傷つけてばかりだから・・・」

「何で思わないの？男の子とはキスしたいの？私と付き合って何したいの？」

不安がどうしようもなく大きくなって、薔薇くんを質問責めにしてしまう。

答えを聞く前に、いっぱいいいっぱいな気持ちから溢れるように涙がこぼれた。

そんな私の顔を見て、薔薇くんがすごく辛そうな顔をする。

「何で思わないのかは言いたくない。男の子とキスしたいとは思わない。百合と付き合って百合を大事にしたい。・・・そう思ってるのにまた泣かせた。涙を拭いてあげたいけど、それすら俺は怖い。」

怖い？

薔薇くんが言ってることが私には全く分からない。

「なんで怖いのか・・・？」

私の問いに答えず、薔薇くんは私の頬に流れる涙に手を伸ばした。でも、その手がすぐ震えている。

薔薇くんの手を私が握ろうとした瞬間、びくっと薔薇くんは手を引っ込めてしまった。

「ほら、やっぱり駄目だった。」

薔薇くんは、そう言って泣きそうな顔で笑う。

「彼女泣かせて、涙拭いてあげることもできなくて、こんなんじゃ付き合っても意味ないよね。百合のこと泣かせてばかりで、俺ほんとにどうしようもない。ねえ百合、俺たち別れた方がいいんじゃない？お互い辛いよ・・・。」

薔薇くんの手は、まだ震えている。

その震えている手をもう片方の手で思いっきり握り締めて薔薇くんは言った。

「そんなこと言われたって分からないよ！薔薇くんも私のこと好きで、私も薔薇くんが好きなのに、なんで別れなくちゃいけないの？そっちのが辛いよ！！！！」

「ごめん」

「ごめんじゃないよ！せめて何で私が怖いのか教えてよ！悲しいよ、理由が分からない！」

もはや、私は大泣きだった。
薔薇くんを失いたくなかった。

「・・・怖い理由、教えるよ。ただ、誰にも言わないで欲しいんだ。
ホモだって言われてる方が楽だから・・・」

しばらくしてから、薔薇くんは言った。
こんな時でも、薔薇くんの口元は微笑んでいた。

第三章 真実 【薔薇】（前書き）

この小説は性的虐待についての描写を含みます。
苦手な方、辛くなってしまう方は閲覧をご遠慮下さい。

第三章 真実 【薔薇】

こんな話をして、百合に嫌われないかすごく不安で怖かった。
でも、どちらにしても別れることになるなら、せめて最後に百合が
聞きたがっていることを教えてあげようと思った。

百合は、泣きながら俺が話始めるのを待っている。
何も知らない、純粋な瞳で俺を見つめている。

嫌われたくない、失いたくない。
俺は、百合が好きだ。

でも言わなきゃいけない。

辛い、怖い、悲しい、悔しい、なんで、どうして

そんな気持ちでいっぱいだけど、俺は話さなくちゃいけない。

「・・・俺のお母さんって、義理の母親なんだ。・・・本当の母親
は俺を産んで直ぐ死んじゃったんだけど、俺が2歳のときにお父さ
んは今の母さんと再婚した。」

ここまでは話せる。
ここから先なんだ。

話したくない、話したくない、話したくない

「・・・俺は義母さんが嫌いだ。・・・違う、怖い、の?」

何を言ってるのか自分でもよくわからなくなってくる。
話したくない、話したくない、話したくない

「薔薇^{しょうび}くん、大丈夫?」

百合が心配そうに俺の顔を覗き込む。
話さなきゃ、だって百合は聞きたがってる。

「あは、ごめん、大丈夫。」

笑って、できるだけ何でもないとこのように話すんだ。
大丈夫、いつもそうやってるじゃないか。

「・・・それで、その義母さんに・・・俺は・・・」

フラッシュバックが凄い。

フラッシュバックは、何回見ても慣れない。
どうしたら消える?

フラッシュバックで気が散って、話せない。

「薔薇くん! 大丈夫?! 落ち着いて、ゆっくりで大丈夫・・・深呼吸

吸して・・・」

百合に言われて初めて気付く。

俺は過呼吸になっていた。

息が上手くできない、冷や汗がシャツを濡らしていた。

情けない。

話せ、早く、話さなきゃ。

「俺、俺は・・・っ義母さん・・・が・・・怖い」

違う！

もっと具体的に言わなきゃ分からないだろ！

分かってる、分かってるけど言いたくないんだ。

「どうして怖いのか？」

ほら、同じ質問がくる。

具体的に言わなきゃ、百合には分からない。

話さなきゃ、落ち着け、大丈夫、平気だ、平気

「・・・義母さんは・・・っ・・・俺が4歳になった頃から・・・ず

っと・・・」

息ができない。

吐けない。

深呼吸の仕方を体が忘れたように、思うように呼吸できない。

苦しい、苦しい、話したくない

「俺に・・・体中を・・・舐めろと言ったり・・・俺の・・・体を・・・」

このフラッシュバックは一生消えないのだろうか。

この話を聞かせることで、百合は汚れてしまわないだろうか。

「嫌だ、嫌だ・・・どうして・・・怒るの・・・？」

もう、どっちが現実だか分からない。

誰かに助けを求めたことなんて

今までも、これからも無い――。

第三章 真実 【百合】（前書き）

この小説は性的虐待についての描写を含みます。
苦手な方、辛くなってしまう方は閲覧をご遠慮下さい。

第三章 真実 【百合】

ゆっくりと話し始めた薔薇くんは、途中からどんどんおかしくなっていた。

呼吸の仕方がおかしいし、一気に汗をかいた。

それでも笑顔で一生懸命話そうとする薔薇くんは壊れているように感じた。

「・・・義母さんは・・・っ・・・俺が4歳になった頃から・・・ずっと・・・俺に・・・体中を・・・舐めろと言ったり・・・俺の・・・体を・・・」

そこまで言くと、薔薇くんの体はがくがくと震えだした。

「嫌・・・嫌だ・・・何で怒るの・・・？」

頭を抱え込み、何かをとて怖がっている。

「薔薇くん！薔薇くん！」

どうしたら良いのか分からず、ただ私は叫んだ。
触ることもできないことの辛さを知った。

「薔薇くん！落ち着いて！もういいから！」

私の声が聞こえたのか、顔を上げる。

薔薇くんは笑いながら泣いていた。

「あは、大丈夫。百合に・・・話さなきゃ、だって・・・聞きたがってる。大丈夫、これが俺だから・・・」

もはや、薔薇くんの言葉は支離滅裂だった。それでも薔薇くんは話を続ける。

「義母^{かあ}さんは・・・変なビデオを見ながら・・・俺に・・・その動きを真似させる、あは・・・。嫌がれば・・・首・・・絞められたり、つタバコを押し付け・・・られ、たり・・・」

体を揺らし、微笑み、泣きながら私を見て、一生懸命話そうとしている。

もう、十分くらい話してくれたのに話を止めない。

「・・・中学生に・・・なると・・・実際に・・・相手をさせら・・・た・・・。気持ち悪い、怖い、なんで？」

薔薇くんの頬に涙の雫が幾筋も伝い、ポタポタと落ちる。
なんで？と私に聞きながら、微笑み続けている。

「・・・百合、も、したいの・・・なら、好きにしてよ。怖い・・・けど、気持ち、わるっ・・・けどいつものことだし・・・ちょっと我慢すれば・・・終わる・・・」

そう言いながら、薔薇くんはブレザーを脱ぎ、Yシャツのボタンを外し始めた。

薔薇くんの上半身は、傷だらけだった。

白い肌に痛々しい程、赤が目立って

私は思わず目を逸らす。

「・・・もう、好きにしてよ・・・」

涙が出た。

薔薇くんは、小さいころから虐待を受けていたんだ。

それも凄まじい性的虐待を。

それを知った今、私は、どうしたら良いのだろう。

ただ、助けてあげたい。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n6744f/>

薔薇の雫

2010年10月11日00時24分発行